

日本鱗翅学会中国支部会報

第20号



ヒオドシチョウ（広島県東広島市）

2019年4月

日本鱗翅学会中国支部

日本鱗翅学会中国支部規約

2001 年 12 月 2 日制定, 2005 年 11 月 26 日改正
2017 年 11 月 18 日改正

- (名称)
第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。
- (目的)
第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。
- (事務局)
第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。
- (事業)
第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。
(1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
(2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
(3) その他、適当な行事を行う。
- 第2章 支部会員
- (組織)
第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。
- (義務)
第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。
- 第3章 役員
- (種類)
第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。
(1) 支部長 1名
(2) 事務局幹事 1名
(3) 幹事 4名
(4) 会計 1名
- (選出)
第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。
幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出、自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。
事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。
会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。
- (職務)
第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。
事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。
幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。
会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。
- (任期)
第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。
事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。
幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。
会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。
- 第4章 例会、総会および会報
- (例会の内容)
第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。
- (開催地)
第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。
例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。
- (例会の運営)
第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。
- (総会の運営)
第14条 総会は支部会員をもって構成する。
総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。
総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- (会報)
第15条 会報は例会を主催した幹事と事務局が草稿を作成、編集する。
会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。
- 第5章 会計
- (経費)
第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。
(1) 支部連絡費(本部より交付) 200 円/年/会員
(2) 支部助成金(本部に申請)
(3) 寄付金、その他
- (資産の管理)
第17条 本支部の資産は事務局が管理する。
- (決算)
第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。
- (会計年度)
第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。
- 第6章 補則
- (会則の変更)
第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。
- (委任規定)
第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。
- 附則
この規約は、平成 14 年(2002 年)1 月 1 日から実施する。
この規約は、平成 18 年(2006 年)1 月 1 日から実施する。
この規約は、平成 30 年(2018 年)1 月 1 日から実施する。

支部例会についての申し合わせ事項(第4回支部総会制定、第20回支部総会一部改正)
2003 年から例会参加費を学会員 500 円、非学会員 1,000 円とする。ただし、高校生以下は徴収しない。
参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

支 部 長 挨 拶

まず支部会報の冒頭をお借りし、昨年の豪雨災害で被害に遭われた方々には心よりお見舞い申し上げます。当日の災難の大きさのみならず、その後も続く不自由な生活は気の遠くなるようなものだったろうと推測され、安易に虫の話を切り出すのも躊躇われます。とは言え日本鱗翅学会中国支部は、皆様の想いも汲みながら、前に進んで参らなければ成りません。

さて、今年は新たな元号の始まる年で何かしら新鮮な気分には満ちていますが、中国支部では支部長の任期満了により今年から私が支部長を務めさせて頂くことになりました。力不足の点は皆様のお力添えを願うこととなりますが、どうぞよろしくお願いいたします。中国支部では、会員の高齢化に伴う退会が続き、また新規加入者を獲得できないことから、会員数の減少という問題を抱えています。社会的背景や会員個人の事情によりやむを得ないことではあるのですが、せめて会員には少しでも有意義な会として、引き続き情報伝達や会員間の交流といった面で満足感を提供できるもので在りたいと考えます。ただ、会員の皆様との連携が無ければ、それらを叶えることはできません。そこで是非とも、皆様には年に一度の中国支部例会にご参加の上、研究発表や歓談を楽しんで頂きたいと思ひますし、またそれをきつ掛けに、日頃の交流も保っていききたいものです。そしてその先には、活気漲る会となり、新たな会員の加入にも繋げていけることを願っています。

思えば2018年は、豪雨ほどではありませんが、その後に続いた猛暑は記録的なものでした。西日本では観測史上最高の2013年に次ぐ記録だったそうです。当然この影響は、昆虫や植物に及んでいるに違いありません。本来なら、私たち自然と関わりの深い者が、つぶさに記録しておくべきことでしょう。私自身の目標でもあります。会員の皆様方も、身の回りの昆虫に関する事象を集積・記録し、是非とも支部例会での発表、或いは支部会報へ寄稿下さるようお願いしたいと思います。皆様方のご活躍に、心より期待いたします。

中国支部 三宅誠治

山口県の昆虫類RDL（2018）蛾類・蝶類の選定種について

後藤 和夫 ・ 五味 清（山口県）

■ はじめに

山口県では2015年10月から野生生物のレッドデータ種の見直し調査が始まり、昆虫類については山口むしの会が現地調査をおこなってきた。調査は二年間に渡り、2017年の12月末時点で調査結果についてまとめ、カテゴリーについて見直し選定を実施した。

その結果、チョウ目の蛾類から情報不足種も含め11科17種が選定されることになった。チョウ目の蝶類については5科36種を選定し、鱗翅目（チョウ）全体では16科54種が、現在、レッドデータリスト（RDL）2018として山口県の自然保護課の「山口県レッドリスト2018」サイトで公的に公開されている。

2018年はこれを基に山口県レッドデータブック（RDB）2019として、2019年3月末公表を目標に編纂作業が進められている。ここではその過程にあたる、RDLに掲載されている鱗翅目（チョウ）について、その概要について紹介する。

■ チョウ目（蛾類・蝶類）の目録と選定種の経緯について

選定種は2015年末時点の目録に従い、そのなかから選定種を決めることを前提にしている。目録については日本鱗翅学会中国支部会報№19（2018）を参照いただきたい。

・蛾類について

2015年末時点で県内から記録されている種数は60科2363種である。これまで県内で蛾類を継続的に調査されている同好者は種数が多い分野にも関わらず少なく限られている。よって調査も限られた範囲に留まり基礎データを集約している段階で、絶滅危惧種の選定には大変苦慮するところである。本来60科全般について詳細なデータが望まれるわけだが叶わず、これまで記録された文献の中より抽出を行い、それに関連し現地で確認してきたデータとの照合を可能な限り実施し、選択可能な種のカテゴリーを見極めることにした。

そのため科によってはほとんどデータ化されてない。とりわけ微小な種については特定な種に限り選定の対象としているが、このような科は多くほとんど選定から除外することにした。また稀少種と思われるが、発見から経過年数の少ない種類も多く、実情を見極め分析するためのデータが不足しているなど、決断に苦慮することになる。よって選定には2002年に発行した「レッドデータブックやまぐち」と2011年に発行した「山口県の昆虫類レッドリスト」に掲載されている種については、優先的に見直し対象種として取り組むことにした。

その結果、絶滅危惧Ⅱ類（VU）3種、準絶滅危惧種（NT）7種、情報不足種（DD）7種で、10科17種を選定することになった。これを初版（2002）の選定種と比較すると14種が新たに選定されたことになり、3種がランクダウンしたことになるが、これは全体の1%にも遠く及ばない少ない種数となる。

蛾類の選定対象種については蛾類の項で推移について簡単に説明することにする。

・蝶類について

2015年末時点で県内から記録されている種数は5科143種である。蝶類については県内の昆虫類の分野では最も解明されている。特に2001年に県内の同好会の組織を一本化し山口むしの会として活動を展開してきた。骨子は昆虫採集の原点に立ち返り、身近な周りに何が生息しているかを知り、有名産地にばかり拘り、珍しい種とか貴重な種などと呼ばれている蝶類ばかり追い求め、採集しては自慢しているような極めて次元の低い活動を一新し、未開拓地の探索に重点を置き保全を視野に入れた調査を実施してきた。

その結果は、会報「山口のむし」に全て記載されている。これまで稀少種と思われていた種が毎年のように発見され、特にシルビアシジミやウラナミジャノメなどは、20年間以上の継続調査から多くのデータを輩出してきた。ほかにもツマグロキチョウからスジグロチャバネセセリの実態も解明され、オオヒカゲなどの新産地が発見され日本国内の西限域を大幅に更新することになった。これらは全て未開拓地の探索と目標を定めて年間を通じた定点調査の賜物といえる。この三年間のレッドデータブックの見直し調査では、瀬戸内海の島々や、日

本海側の島嶼部まで探索を実施し詳しく県内の実状が把握でき、これらは全てレッドデータリスト 2018 作成の礎となってカテゴリーの見極めを実施した。ただ一部の種で例えば、ホシチャバネセセリやコキマダラセセリ、ヒメシジミなど最近のデータが無い種があるなどカテゴリーの選定に苦慮する種も少なからずある。反面 20 年以上データの無かった種が発見されるなど、選定に際し教えられることもあった。

これらを総合的に分析し検討した結果、絶滅種 (EX) 3 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 11 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 4 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 8 種、準絶滅危惧 (NT) 10 種の、5 科 36 種を選定することになる。

蝶類の選定対象種については蝶類の項で推移について簡単に説明することにする。

なお、見直し前の蛾類と蝶類の「レッドデータブックやまぐち (2002)」におけるカテゴリーが、どのように変わったかを(→)で示す。

■ 蛾類の項

- ・オオミノガ *Eumeta variegata* (Snellen, 1879) (CR → VU) (Fig.1)

本種の激減に伴い、寄主を失った天敵オオミノガヤドリバエも衰退したことで、各所で生息の再確認されたが、近年、再び寄生される確率が極めて高まっており、双方の発生バランスの推移に注意を要する。

- ・サツマニシキ *Erasmia pulchella* Hope, 1841 (→ VU) (Fig.2)

下関市と岩国市の二ヶ所から発見されている。岩国市の個体数は少なく、下関市に於いても発生数に年次変動が見られる。食樹のヤマモガシの自生地も局限されるようで、県内の分布域は狭い種である。

- ・フチグロトゲエダシャク *Nyssiodes lefuarius* (Erschoff, 1872) (→ VU) (Fig.3)

県の宇部市や山陽小野田市から発見されその範囲は約 10 km の円内に留まる。局所に生息する種で、生息環境は休耕地など放棄された草地で、造成など環境変化の影響を受けやすく非常に不安定である。

- ・オキナワリチラシ *Eterusia aedea* (Clerck, [1763]) (VU → NT) (Fig.4)

県央部に産地が点在するが、一時期の様に限られた場所ではなく、調査からその生息域は広いことが伺える。ただ毎年安定した個体数が見られることは無く、発生に年次変動がある。

- ・ハネホソトガリミズメイガ *Eristena* sp. of Yoshiyama, 2013 (→ NT) (Fig.5)

美祢市から発見されて国内では福岡県に次いで二例目となる。生息域は狭く非常に限定されことから、河川の改修などにより一気に絶滅する危険性が残されている。新たな産地を開拓することも今後の課題となる。

- ・アキヨシトガリエダシャク *Hypoxystis pulcheraria* (Herz, 1905) (→ NT) (Fig.6)

秋吉台で初めて発見された種だが、石灰岩質に依存される種の様で福岡県からも新たな発見があった。ただ産地は限定されており、個体数も年次変動が見られる。また他所の石灰岩質地域の調査も残されている。

- ・カバイロシャチホコ *Ramesa tosta* Walker, 1855 (→ NT) (Fig.7)

県内では岩国市でも古い記録が見られるが、現在は秋吉台でのみ確認できる。個体数は少なく今後の推移に注意が必要である。

- ・ダイセンセダカモクメ *Cucullia mandschuriae* Oberthür, 1884 (DD → NT) (Fig.8)

秋吉台でのみ確認されている種である。個体数に年次変動が見られる。

- ・ギンモンセダカモクメ *Cucullia jankowskii* Oberthür, 1884 (DD → NT) (Fig.9)

秋吉台でのみ確認されている種である。個体数に年次変動が見られる。

- ・アオモンギンセダカモクメ *Cucullia argentea* (Hufnagel, 1766) (DD → NT) (Fig.10)

秋吉台でのみ確認されている種である。個体数は上記のセダカモクメ中一番少ない。

- ・アキヨシヒゲナガ *Nemophora smaragdaspis* (Meyrick, 1924) (→ DD) (Fig.11)

国内では秋吉台でのみ確認されていた種である。最近の調査で山口市からも新たな発見があった。個体数は限られるが、新たな発見で食草のホストはハギであることから、調査次第で新たな生息地が期待できる。

- ・エンスイミズメイガ *Eristena argentata* Yoshiyasu, 1988 (→ DD) (Fig.12)

山口市の河川の海水の交ざり合う場所で発見された種である。生息環境から調査は容易ではなく、生態についてはまだ解明すべきことが残されている。

- ・フジキオビ *Schistomitra funeralis* Butler, 1881 (→ DD) (Fig.13)

岩国市の標高の高い中国山地で発見された種である。発見された二ヶ所とも個体数は少なく限られる。

- ・シロオビフユシヤク *Alsophila japonensis* (Warren, 1894) (VU → DD) (Fig.14)

県内では柳井市から光市, 周南市, 山口市, 山陽小野田市などの山陽側から発見されている。ただいずれの産地も個体数は限られるようで、今後の状況に注意が必要である。

- ・スゲドクガ *Laelia coenosa* (Hubner, [1808]) (→ DD) (Fig.15)

山口市や萩市, 柳井市の湿原地帯から発見されている。食草の多さに比べ発見地は少なく限られており、また成虫の個体数も多くない。今後の調査を要す種である。

- ・マエアカヒトリ *Aloa lactinea* (Cramer, 1777) (→ DD) (Fig.16)

県内では秋吉台でのみ発見されていた種だが、萩市の市中からも新たな発見ができた。個体数は少ないものの、食草の関係から畑地など広域に調べを要す一種である。

- ・アキヨシアカスジャガ *Heliocheilus bimaculata* (Moore, 1888) (→ DD)) (Fig.17)

発見されてまだ新しいが、県内では秋吉台でのみ確認されている。個体数にやや年次変動が見られる。近県では福岡県からの報告があり、これから新たな生息地の見つかる可能性は残されている。

<蛾類の生態写真>

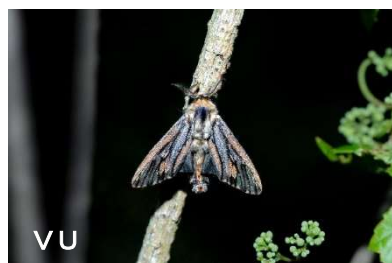


Fig.1 オオミノガ



Fig.2 サツマニシキ



Fig.3 フチグロトゲエダシヤク♂♀



Fig.4 オキナワリチラシ



Fig.5 ハネホントガリミズメイガ



Fig.6 アキヨシトガリエダシヤク



Fig.7 カバイロシャチホコ



Fig.8 ダイセンセダカモクメ



Fig.9 ギンモンセダカモクメ



Fig.10 アオモンギンセダカモクメ



Fig.11 アキヨシヒゲナガ

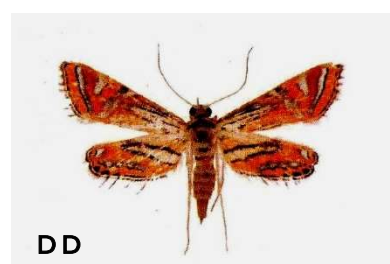


Fig.12 エンスイミズメイガ



Fig. 13 フジキオビ



Fig. 14 シロオビフユシャク



Fig. 15 スゲドクガ



Fig. 16 マエアカヒトリ



Fig. 17 アキヨシアカスジャガ

■ 蝶類の項

- ・ミドリシジミ *Neozephyrus japonicus* (Murray, 1875) (→ EX) (Fig.18 県外産使用)

県内では 1956 年の記録以外は見あたらない。その発見地は森林開発によりスギ・ヒノキの植林地に移行しており、再発見される可能性は既に失われている。

- ・ヒョウモンモドキ *Melitaea scotosia* Butler, 1878 (→ EX) (Fig.19 県外産使用)

県内の記録は 1956 年に限られる。その発見地は田畑の開拓により既に失われている。以降現在まで再発見の報告は皆無である。

- ・ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus* (Fabricius, 1787) (→ EX) (Fig.20 県外産使用)

1992 年の記録を最後に再確認の報告は見あたらない。現在の生息環境は草原の開発などにより大きく変貌しており、草原の維持管理も放棄したことから再発見の可能性は限りなく低い。

- ・キバネセセリ *Burara aquilina* (Speyer, 1879) (VU → CR) (Fig.21)

岩国市の中国山地沿いに生息しており、発見当初から個体数は少ない。その後、森林伐採などにより生息環境は狭められ、稀少性は一段と高くなった種である。県内では成虫の発見しにくい代表種である。

- ・ホシチャバネセセリ *Aeromachus inachus* (Ménétrières, 1858) (CR → CR) (Fig.22)

各所に点在していた発生地も二ヶ所に限定されていたが、その二ヶ所も草原の放棄により生息環境は激変している。成虫の発見しにくい代表種で、絶滅が危惧されている。

- ・ヘリグロチャバネセセリ *Thymelicus sylvaticus* (Bremer, 1861) (EN → CR) (Fig.23)

県の東北部の高原地帯に多産地があったが、草原の管理放棄により生息地は消失している。現在山陰側の沿岸部に小規模の産地が発見されたが、個体数は少なく稀少性は高まっている。

- ・コキマダラセセリ *Ochlodes venatus* (Bremer et Grey, 1852) (CR → CR) (Fig.24)

県内の二ヶ所の生息地も草原の管理放棄により環境はより悪くなっている。最近成虫を見ることはほとんど無く、絶滅が危惧されている種である。

- ・ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech, 1889 (VU → CR) (Fig.25)

県内の蝶類でここまで減少した種は珍しく、県東部から北部にかけて多くあった生息地はことごとく消滅している。要因は過疎化にともなう生息環境の維持管理放棄がもたらす植生遷移による。また採集マニアによる乱獲（食草と卵の採取）も大きな要因として考えられる。保全地以外での確認は困難となっている。

- ・カシワアカシジミ *Japonica onoi* Murayama, 1953 (CR → CR) (Fig.26)

岩国市の県境部に生息する種で冠高原の特産種となっている。県内側は植生遷移も一段と進み生息環境は悪化している。現在採卵以外では成虫の観察できる場所は限定され、個体数も非常に少ない。

・カラスシジミ *Fixsenia w-album* (Knoch, 1782) (DD → CR) (Fig.27)

山口市の山間部に局所的に生息する種である。1990 年代の半ばに食樹が伐採されて以降、一ヶ所は工場が建設され消滅した。残りの一ヶ所も伐採のダメージは大きく、かろうじて発生している状況である。

・クロシジミ *Niphanda fusca* (Bremer et Grey, 1852) (EN → CR) (Fig.28)

県内の生息地も局限されてきた種である。東部の生息地は個体数も少なく不安定である。中央部においても、生息地の管理放棄と伐採などの要因があり個体数に変動が大きく不安定である。

・ヒメシジミ *Plebejus argus* (Linnaeus, 1758) (CR → CR) (Fig.29)

県東北部に残された生息地も草原景観の放棄と環境変化も加わり、水系に影響がでて生息環境は悪化している。採集の自粛は 10 年も前から実施していたが、採集マニアにより壊滅に近い状況になっている。

・オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* (C. Felder et R. Felder, 1862) (CR → CR) (Fig.30)

現在秋吉台にのみ生息している。発見当初に比べその衰亡は大きい。維持管理された草原で発生している。現在草原の景観事業とボランティアによる草原復元作業に取り組み、環境の維持に努めている。

・クロヒカゲモドキ *Lethe marginalis* (Motschulsky, [1861]) (EN → CR) (Fig.31)

数ある生息地もことごとく失われ、現在県内二ヶ所のみ発生が確認できている。過疎化に伴い生息環境が維持できなくなったことが、衰退の大きな要因となる。

・ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler, 1878) (DD → EN) (Fig.32)

県内各所に産地が点在していたが、ことごとく植生遷移により消失している。安定した産地は現在はなく、これは草地在り放棄されたことによる。過疎化に伴いこれから更に生息地が失われる懸念がある。

・ウスイロオナガシジミ *Antigius butleri* (Fenton, [1882]) (→ EN) (Fig.33)

県境部のカシワ林にのみ生息している種である。高原の維持放棄により生息環境は失われる懸念がある。

・クロツバメシジミ *Tongeia fischeri* (Eversmann, 1843) (VU → EN) (Fig.34)

山陽側の生息地では 10 年以上再発見はない。山陰側の生息地でも個体数の年次変動が見られる。生息地の海岸部は自然による風化にともない、生息環境は徐々に狭められている。

・ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice* (Pallas, 1771) (VU → EN) (Fig.35)

ヒョウモン類中、生息地の多くが消失した代表種である。現在内陸側には安定した発生地は見あたらない。過疎化の影響も加わり生息環境の維持管理が放棄され、植生遷移により産地は喪失している。

・ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey, 1852) (VU → VU) (Fig.36)

県内各所にあった産地はことごとく消失している。生息環境として維持されてきた里地里山が、過疎化にともない放棄されてきたことが一番の要因となる。

・ツマグロキチョウ *Eurema laeta* (Boisduval, 1836) (EN → VU) (Fig.37)

一時期農耕地改良事業などで多くの食草が失われ、その個体数も大きく減少してきた。一部地域で活性化事業により食草の栽培と、休耕地で発芽した食草の復元から徐々に個体数が増してきた気配が見うけられる。

・ハヤシミドリシジミ *Favonius ultramarinus* (Fixsen, 1887) (→ VU) (Fig.38)

県境部のカシワ林にのみ生息する種である。草原の管理放棄により植生遷移も加速され、生息環境の悪化が影響して、個体数も年々減少する傾向が大きい。

・ミヤマカラスシジミ *Fixsenia mera* (Janson, 1877) (DD → VU) (Fig.39)

県東北部の山間地域の渓谷部に生息する種である。樹木の維持管理が行われなくなり、生息地は植生遷移により食樹が徐々に衰退している。現在確認できる個体は限られ、その機会もごく希となっている。

・スギタニルリシジミ *Celastrina sugitanii* (Matsumura, 1919) (→ VU) (Fig.40)

一時期の森林開発により食樹がことごとく伐採され個体数は大きく減少した。現在県東北部から中央部の残された食樹の周りで、限られた個体が生息するのみである。

・ホシミスジ *Neptis pryori* Butler, 1871 (NT → VU) (Fig.41)

県東部の島嶼と東部の内陸側にかけて産地が点在する。その個体数は多くなく、一部地域では水没する生息地の代替地を確保し、食樹の移植などしながら種を存続する取り組みがなされている。

・クモガタヒョウモン *Nephargynnis anadyomene* (C. Felder et R. Felder, 1862) (→ VU) (Fig.42)

大型ヒョウモン類中、減少傾向が大きい種である。産地は各所に点在するが安定した産地は見あたらない。里地里山の喪失と共に衰退してきた一種となる。

・オオヒカゲ *Ninguta schrenckii* (Ménétrières, 1858) (VU → VU) (Fig.43)

多産地だった県境部の二ヶ所は草原の放棄により発生地は限られてきた。一部では生息環境を破壊する行為がなされるなど悪循環がある。ただ北部地域で新たな生息地が発見された。

・スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus* (Butler, 1878) (VU → NT) (Fig.44)

環境改変事業などで一時期大きく個体数を減じた時期があった。その後調査から新たな産地が発見されなど広範囲に生息地が判明してきた。ただ個体数については年次変動が見うけられる。

・スジボソヤマキチョウ *Gonepteryx aspasia* Ménétrières, 1858 (NT → NT) (Fig.45)

県境部から中央部にかけて産地が点在するが、個体が見られる地域は北部地方に限られてくる。生息地では植生遷移も見られ、発生地は徐々に狭められている懸念がある。

・ルーミスシジミ *Arhopala ganesa* (Moore, [1858]) (VU → NT) (Fig.46)

一時期の森林開発で生息地が危ぶまれた時期があったが、森林の伐採も行われなくなった現在、生息環境は徐々に回復され、生息地も含め個体数も回復傾向にあるが、発生年に個体数の変動が見うけられる。

・ウラキシジミ *Ussuriana stygiana* (Butler, 1881) (NT → NT) (Fig.47)

県境部に生息地は限定される。一部の生息地は道路の補修工事により食樹が伐採され個体数も減少した。

・ウラクロシジミ *Iratsume orsedice* (Butler, [1882]) (NT → NT) (Fig.48)

県境部に生息地は限定される。一部の生息地は植生遷移により生息環境が悪化している。個体数も年次変動が大きい。

・シルビアシジミ *Zizina emelina* (de l'Orza, 1869) (VU → NT) (Fig.49)

全県で圃場整備事業により一時期個体数の減少が見られた。その後の調査から、宇部市を中心に各市町から産地が発見されてきた。ただ農耕地の放棄から生息地も徐々に失われる地域も散見できる。

・オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866) (→ NT) (Fig.50)

過疎化にともない草原や里地里山が失われ、産地も局所的になり個体数も減少してきている。

・ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe* ([Denis et Schiffermüller], 1775) (DD → NT) (Fig.51)

過疎化にともない里地里山が失われ、生息環境である明るい草原の荒廃により、生息地は局所的で、個体数も減少してきている。

・オオムラサキ *Sasakia charonda* (Hewitson, [1863]) (NT → NT) (Fig.52)

里地里山の喪失とともに食樹のエノキのほか、クヌギやコナラなど樹液の供給源が伐採されて生息地は徐々に狭められ、個体数も減少傾向にある。

・ウラナミジャノメ *Ypthima mul multistriata* Butler, 1883 (VU → NT) (Fig.53)

主に里山を生息環境にしていることから、農地改良事業の影響などで、一時期生息地も限られたが、調査から各地域に産地の存在が明らかになってきている。ただ植生遷移が懸念される。

引用・参考文献

五味 清, 2018. 周南市大津島の蝶類. 山口のむし, (17) : 52-58.

後藤和夫, 2018. 山口県の鱗翅目目録について. 日本鱗翅学会中国支部会報, (19) : 6-8.

渡辺一雄・中西 淳・後藤和夫・管 哲郎・岡村元昭, 2012.

フチグロトゲエダシャク——山口県南西部における記録と生態. 山口のむし, (11) : 57-71.

山口県環境生活部自然保護課 (編), 2002. レッドデータブックやまぐち. 513pp., 山口県, 山口.

山口むしの会稀少昆虫類選定委員会 (編), 2011. 山口県の昆虫類レッドリスト 2011, 198pp. 山口むしの会.

山口むしの会 (編), 2017. 山口県の昆虫目録 2016. 34pls., 1811pp., 山口県立山口博物館, 山口.

参考サイト

「山口県レッドリスト 2018」 <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a15600/index/>

(2018 年 4 月 10 日 閲覧)

<蝶類の生態写真>



Fig.18 ミドリシジミ



Fig.19 ヒョウモンモドキ



Fig.20 ヒメヒカゲ



Fig.21 キバナセセリ



Fig.22 ホシチャバネセセリ



Fig.23 ヘリグロチャバネセセリ



Fig.24 コキマダラセセリ

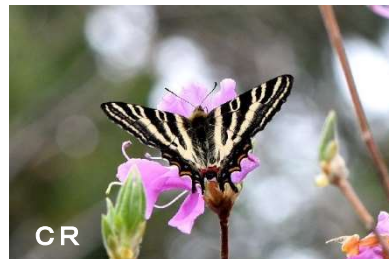


Fig.25 ギフチョウ



Fig.26 カシワアカシジミ



Fig.27 カラスシジミ



Fig.28 クロシジミ



Fig.29 ヒメシジミ



Fig.30 オオウラギンヒョウモン



Fig.31 クロヒカゲモドキ



Fig.32 ミヤマチャバネセセリ



Fig.33 ウスイロオナガシジミ



Fig.34 クロツバメシジミ



Fig.35 ウラギンスジヒョウモン



Fig.36 ギンイチモンジセセリ



Fig.37 ツマグロキチョウ



Fig.38 ハヤシミドリシジミ



Fig.39 ミヤマカラスシジミ



Fig.40 スギタニルリシジミ



Fig.41 ホシミスジ



Fig.42 クモガタヒョウモン



Fig.43 オオヒカゲ



Fig.44 スジグロチャバネセセリ



Fig.45 スジボソヤマキチョウ



Fig.46 ルーミスシジミ



Fig.47 ウラキンシジミ



Fig.48 ウラクロシジミ



Fig.49 シルビアシジミ



Fig.50 オオウラギンスジヒョウモン



Fig.51 ウラギンヒョウモン



Fig.52 オオムラサキ



Fig.53 ウラナミジャノメ

ヒオドシチョウの生態（予報）

本田 計一（西条生態研）（広島県）

周知のように、ヒオドシチョウは多くの地域に生息し、ごく普通に見られる年1化性のチョウである。成虫は羽化後しばらく活動してすぐ夏眠に入り、真夏には殆ど姿を消すが、秋季には再び短期間活動してその後越冬する。翌春には活動を再開して、交尾、産卵を行う。孵化幼虫は食樹（エノキやヤナギ類など）の新芽を食べ、概ね終齢まで集団で成育するが、蛹化時には通常分散して移行する。これが本種の大まかな一生である。どの書物にもほぼ同様の記述がなされ、本種の周年経過や幼・成虫の生態については概ね既知の事項とみなされている。しかし、何故、何処で、どのような状態で成虫は暑い夏を過ごしているのか、どんな場所で越冬するのか、幼虫はなぜ集団で生活するのか、何故年1化性なのか、等々疑問は多い。また特に、成虫の生活態様に関しては野外で観察できる期間や機会が著しく限られているために、不明な点が多い。

筆者はこれらの疑問点について何らかの知見を得ることを目的として、ここ数年間ほぼ毎年、野外ネットケージ（6.5m×12.5m, 最大高約3.5m）内で、必要に応じて個体識別した成虫を用いて、羽化時から翌春の交尾、産卵までの間、その活動状態、採餌行動、休眠の様子などを観察してきた。ケージ内には吸蜜用の花卉類やエノキを含むさまざまな植物を配置し、樹液代用物（ショ糖、酢、酒の混合液をさらに発酵させたもの）を夜間を除いて常時、枯木上を流下するように設置した。成虫はいつでも採餌活動を行える環境下にあり、ケージの約1/4のスペースは遮光ネットなどを用いて常時日陰の状態を保った。またコンクリート製のブロックを用いて、このスペースにトンネル様の小空間も設定した。さらに毎日2回（早朝と午後）に散水し、吸水可能な状態にしておいた。一方、本施設（標高約270m）の近傍で本種の発生（幼虫の存在）が見られる数か所について、毎年の発生消長も調べた。

【1】野外における発生状況

広島県東広島市八本松町を起点として、それより南部のエリア（約30km以内）における本種の発生状況を、2014年から2018年に亘って調べた。あらかじめ本種の食樹になり得るエノキ、ヤナギ類、アキニレが生育している場所を確認しておき、毎年通常、5月上旬にそれらの食樹における幼虫の発生状況を調べた。捕食によるものか、幼虫の脱皮殻（群）は観察されるが幼虫そのものは確認されない例も稀に有ったが、その場合も対応する幼虫群が居たものとしてカウントした。この地域に自生もしくは植栽されている食樹の本数は多くなく、観察期間中に根元から伐採された木や部分剪定された木も少なくなかったため、場所によっては調査結果に人為的影響も含まれることをお断りしておく。調査では発生木上の幼虫群の数を調べた。これは産下された卵塊の数と基本的に対応するものと判断されるが、終齢以降は分散傾向がみられるため、一部については同腹の群を多重カウントした可能性は否定できない。

幼虫の発生はエノキで最も頻繁にみられたが、シダレヤナギでも観察され、アキニレでも一箇所確認された。いずれの場合も陽当たりの良い開けた場所に生育する食樹にのみ幼虫がみられ、エノキに関しての発生木は、道路脇に自生するものに集中する傾向がみられた。また、どの食樹においても、毎年同じ木に発生する傾向がやや顕著であり、そのためか発生木は概ね特定の場所に限定されていた。加えて、樹高10mにも及ぶと推察される大木には殆ど発生はみられず、大部分は概ね5m以下の木に発生がみられた。これは恐らく、本種の飛翔高度（対地面）は通常数m以内であり、母チョウは産卵に際して陽当たりが良く、飛翔空間の広い場所に生える食樹を好むことによるもの

と推察されるが、高所は概して風が強く、安定した産卵姿勢を取りにくいことも一つの要因かも知れない。比較的高頻度で発生が見られたポイントの景観を図 1 に示した。八本松地区では道路沿いに 3 本ほどのエノキの中木があり、吉川地区では古河川沿いに 20 本を超えるシダレヤナギが植栽されている。鏡山地区は広大敷地に隣接していて 2 本の中木があり、福本地区では 2 本の大木（これらでは幼虫の発生が観察されたことはない）と 4 本の中～小木がある。これらは 2018 年春時点での食樹の状況であるが、過去に存在していて伐採されたエノキや剪定によりかなり小さくなったエノキも少なくない。

2014 年は 5 月 8 日に調査を行った。八本松と鏡山地区での発生は確認できなかったが、吉川地区ではシダレヤナギに 22 群の 2～4 齢幼虫が、アキニレに 1 群の 3 齢幼虫が認められた。本シダレヤナギでは 23 本中 19 本に幼虫が見られ、極めて高密度に産卵が行われたものと考えられた。一方、福本地区ではエノキに 1 群の 4 齢幼虫が見られ、原地区でも道路際のエノキに 1 群の 4～5 齢幼虫を確認したが、翌週の再調査では既に伐採されていて、蛹化の形跡は確認できなかった。

2015 年も 5 月 8 日に調査を行ったところ、八本松地区でエノキに 1 群の 5 齢幼虫が見られた。吉川地区ではシダレヤナギに 6 群の 4～5 齢幼虫が見られたものの、前年からの減少が著しかった。昨年の蛹には高頻度で寄生蜂の発生が見られたことから、このことも原因の一つと推察される。なお、同地区ではアキニレにも 1 群の幼虫脱皮殻（3 齢？）が見付かったが、捕食されたものか幼虫そのものは発見できなかった。さらに鏡山地区ではエノキに 1 群の 5 齢幼虫が確認されたが、福本地区では一部



図 1 主な発生場所の概観

伐採の影響か幼虫は見られなかった。

2016年には5月4日に調査を行い、八本松地区のエノキに4群の3～4齢幼虫、吉川地区のシダレヤナギに4～5群の3～4齢幼虫、鏡山地区のエノキに1群の4齢幼虫を確認したが、吉川地区のアキニレや福本地区では発見できなかった。

2017年は5月3日に調査を行ったが、奇異なことにこの年はなぜかどの地区においても全く発生が認められなかった。そこで、上記の観察地区の南西に位置する黒瀬地区においても後日調査を行ったところ、1本のエノキにのみ3齢幼虫のものと推察される1群の脱皮殻が見付かったが、その部分以外に食痕は認められず幼虫も見出されなかった。結局、この年は幼虫を全く発見できなかった。(補足) 黒瀬地区には黒瀬川河岸を中心にかんりの本数のエノキが自生し、路肩や道路沿いの私有地にもエノキ、シダレヤナギ、ウンリュウヤナギが少なからず見られ、陽当たりも大変良い。しかし、近隣に雑木林や成虫の餌源が少ないことによるものか、本種の発生は殆ど見られない。

2018年は4月30日と5月3日に調査を行ったところ若干の復活が見られ、吉川地区のシダレヤナギに2群の4～5齢幼虫と福本地区のエノキに3群の4～5齢幼虫が確認されたが、他の地区での発生は見られなかった。発生消長に関する考察はまた別の機会に行いたい。

【2】成虫の採餌活動（羽化から翌春）

羽化後間もない本種成虫が樹液を訪れて吸汁することは良く知られており、典型的な樹液（発酵代謝産物）食性を示すチョウと考えられている。しかしながら冒頭に述べたように、さまざまな花（主にクマツヅラ科、シソ科、アブラナ科、フジウツギ科、キク科、ミカン科など）を植栽し、人工樹液を設置した本野外ケージにおいては樹液を訪れる個体は多いものの、常に多数個体の訪花が観察された（図2）。この人工樹液（図3）には他にもシータテハやオオムラサキなども訪れて吸汁することを確認していることから、誘因性が乏しい訳でも食餌として不適当な訳でもないように思われる。同腹の個体群間の差や性差の見られる場合もあったが、2015年の結果（31オス、39メス）では、樹液、花蜜および両方で摂食した個体の割合は、それぞれ35.7%、44.3%、20%であった。2016年のA群（18オス、9メス）ではそれぞれ、29.6%、59.3%、11.1%、B群（32オス、26メス）ではそれぞれ、34.5%、46.6%、19%であった。このように樹液のみで摂食した個体の割合は約1/3程度と余り多くなく、逆に訪花性の強いものは約半数に上った。この事は既に明らかにされているように（本田、1976）、本種が潜在的には比較的顕著な訪花性を備えていることを示したものと考えられる。

越冬後の成虫が樹液のない早春（3～4月）に、ウメ、サクラや菜の花などで吸蜜する行動はしばしば観察されているが、初夏に訪花することは比較的稀である。これは本種が生息場所として、草原のようなオープンランドではなく樹林帯の林縁部などを好むことと深く関連していると推察されるが、ケージ内には日陰も有り、吸蜜植物に加えて多くの植物が植栽されていて、林縁部の環境に近いことが一つの大きな要因ではないかと考えられる。因みに、このケージ内では、ルリ

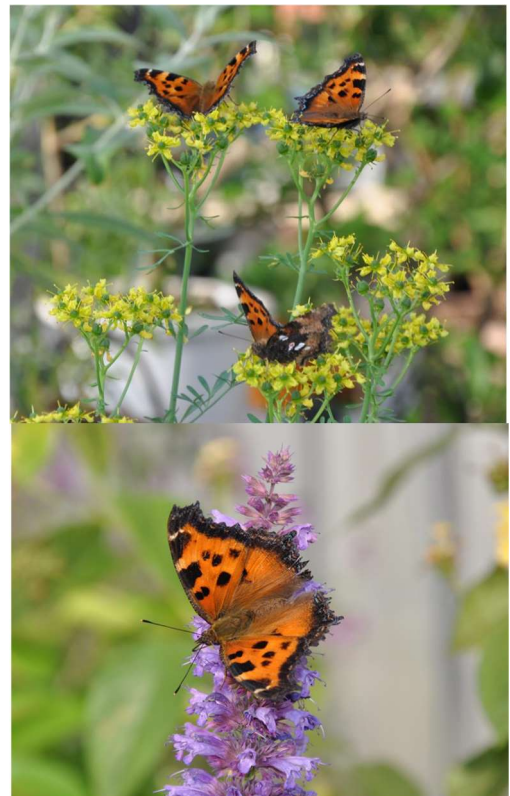


図2 訪花（上：ルー、下：アガスターシェ） 2016/5/30

タテハも好んで花で吸蜜することを確認している。そもそも樹液より花蜜の方が糖分などは圧倒的に多いため、花蜜が入手し易い環境下では花での採餌を優先するとも考えられる。

一方、8月下旬～11月上・中旬頃までの間に成虫が再び活動して、採餌行動を行うことがかなり頻繁に観察されるが、その場合、樹液にも訪れる個体は少なからずいるものの、日光浴を兼ねてか、やはり訪花する個体の方がやや多い傾向にある。また、越冬後（翌春）の活動時期に樹液を設置したことはないが、菜の花や特定の造花には好んで飛来する。

【3】成虫の夏眠

さて成虫は当地では例年5月下旬に羽化するが、通常約2週間（年によっては1ヶ月間弱）活動して6月中旬（年によって6月下旬）から休眠（夏眠）に入る。この時季の夏眠は地面から比較的高い位置（1～1.5m程度）で行われることが多く、茂った植物の薄暗い葉裏でよく観察されるが（図4）、本種は「黒い物」を強く好む習性があり、黒色の遮光シートやビニール紐などに止まって休眠することが多い。直射日光の当たらない場所に限定されるが、極端に暗い場所は避ける傾向があり、比較的明るい～やや薄暗い環境下での局所的に暗い（黒い）場所を好む。しかし盛夏（8月）には気温、日照の増加によるものか、より地表面に近い位置に移動する傾向がみられるが、夏眠場所はさまざまである。

比良山系や大台ヶ原における調査報告（桜谷ら、1997；桜谷・伊藤、2002；伊藤、2011；伊藤らの調査資料）によると、標高1000～1500mの山中や山頂付近の倒木や人工資材等の下面、側溝内など、直射日光を避けて適度な湿度が保たれそうな場所で夏眠する個体は何頭も確認されている。

【4】成虫の秋季再活動と越冬

朝夕の気温が低下し始める8月下旬～9月上旬（年によっては8月中旬）頃から活動（採餌と日光浴）を始める個体の数が次第に増加する。毎日全ての個体が活動する訳ではなく散発的であるが、人間が“いかにも秋らしい”と感じるような爽やかな日の午前中には多くの成虫が活動するのは興味深い（図5）。この秋季活動は約2ヶ月間散発的に続き、通常10月下旬頃には大部分の個体が越冬に入るが、近年は気温上昇のためか11月中旬頃まで時折活動の見られることがある。

越冬は地表から1m以下の直射日光の当たらない場所で行われ、前述の黒色遮光ネットの隙間や地面近くの植木鉢の縁などの場合も多い。しかしいずれの場合も夏眠と同様、極端に暗い場所は避け、総じ

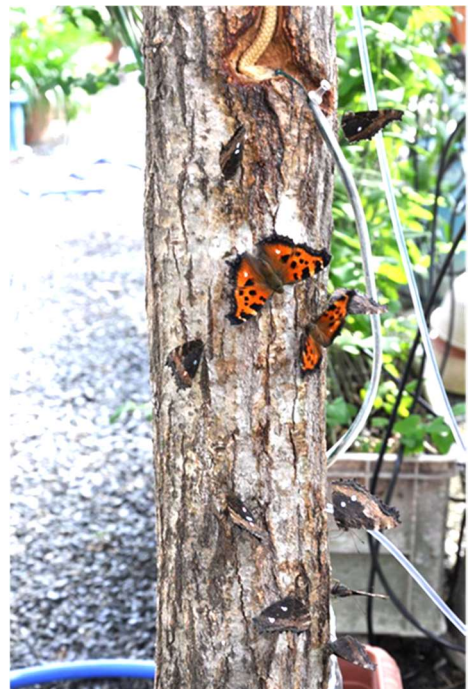


図3 人工樹液で摂食 2014/6/4



図4 夏眠中の2頭 2016/7/19



図5 ヤマヒヨドリでの吸蜜 2018/10/24

てかなり無防備な体勢で静止していることが多い(図6)。従って、コンクリートブロックで囲んだ暗いスペース(夏季の高温や冬季の寒風の影響を少なくすることができ、天敵にも襲われにくいと予想される)などに入って休眠する個体は、例年僅か数頭(1~3頭)に過ぎない。羽化後から秋までの間に死亡する個体が多い上に、居場所を固定して実際に越冬に入るまでに複数回場所を変える個体が少なくないため、前述の夏眠場所と同様、越冬に際してどのような場所を選好するのかを把握することは容易でない。因みに長年、本種の越夏、越冬場所を野外で調査されている伊藤ふくお氏は、奈良県吉野郡川上村(標高約400m?)において2015年の1月と2月に、同一個体が石垣の隙間で越冬しているのを確認されている。やはり周囲が明るく、しかも複雑に入り組んだ場所でない点が共通している。



図6 越冬中の2頭 2018/11/2

【5】越冬後の活動、交尾、産卵

越冬後(翌春)の活動は通常3月上旬から見られるが、暖かい年には2月中旬にも一部個体の活動の観察されることがある。活動初期には午前中の日光浴や吸水が中心であるが、徐々に訪花も行うようになり、気温の上昇と体の慣れ(?)も伴ってか活動時間も長くなって、夕刻(15~16時)にまで及ぶ(図7, 8)。しかしこの頃の天候は変わり易く夕刻には気温の低下も顕著なことから、日照が弱くなったり気温が低下すると直ちに活動を止め、休止・睡眠に入る。この時の休止場所はさらに無防備で、地面近くの植木鉢などの縁や枯れ葉などの場合が多い。日中の気温が15~20℃程度になると成虫の活動はさらに活発になり、オスによるメスの追飛などの配偶行動が日常的に観察され、3月中・下旬には交尾が見られる。さらに4月に入ると産卵行動が見られ、これは同下旬まで観察される。



図7 日光浴中の越冬個体 2016/3/15

以上が羽化から翌春に至るまでのヒオドシチョウ成虫の生態の概要であるが、翌春までの生存率、途中の死亡原因、配偶行動、産卵行動、幼虫の成育条件、その他、生態上の疑問点などについては、今後の観察などによってさらに知見を蓄え、また別の機会に改めて報告したい。



図8 菜の花で吸蜜 2015/3/22

【引用文献】

- ・伊藤ふくお(2011) ならがしわ、No. 139.
- ・桜谷保之・伊藤ふくお(2002) 昆虫と自然、37(13), 19-22.
- ・桜谷保之・大橋和典・森田浩文・伊藤ふくお(1997) 蝶と蛾、48(2), 94-96.
- ・本田計一(1976) 蝶と蛾、27(2), 52-58.

2018 年 岡山県美星台地のウラギンスジヒョウモン

岡野 貴司（岡山県）

1 岡山県の現状

ウラギンスジヒョウモン（以下ウラギンスジ）は特に西日本において衰退傾向が著しく、中国地方でも近年記録の途絶えてしまった県がある。岡山県では準絶滅危惧種であるが、現状はもっと厳しいものかもしれない。岡山県の過去のデータを見るとほぼ全域で記録があり、少なくとも 1980 年頃まではそれほど珍しいチョウではなかった。しかし、その後急速に減少し、近年記録が報告されているのは県南西部の笠岡市～井原市（今回の美星台地も含む）の地域しかない。

2 美星台地とは

美星台地とは私の造語である。この台地が旧美星町（現:井原市）を中心としていることからそのようによんでいる。吉備高原の西南部に位置し、東は美山川、西は宇戸川、南は小田川の急峻な崖で画されており、北は森林地帯をへて高梁市と繋がっている。この台地は北東～南西方向にやや細長い、東西約 10 km、南北約 9 km の広さがある。

3 調査に当たって

藤本徹哉氏が本種の笠岡市から井原市南部の調査を行い、その結果を本支部会報 19 号（2018 年 4 月発行）に発表した。それに連続する美星台地では、以前から生息が確認されていたものの詳しい状況は分かっていなかった。この美星台地での調査にあたって、なぜ西日本で著しく減少してしまったのか、逆になぜ美星台地では比較的安定して生息できているのかに迫ることができたという思いであった。美星台地と同じような環境は周辺の山村にいくらかでも見られるが、近年記録は出ていない。その生息上の制約として近縁のヒョウモンチョウ類との関係が考えられる。ウラギンスジと中～短草草原のウラギンヒョウモン（以下ウラギン）、また森林性のヒョウモン類は生息環境や発生時期を微妙にずらせて棲み分けているが、スミレ資源の利用においても重ならないように棲み分けているのではという推論を立てて調査に臨んだ。

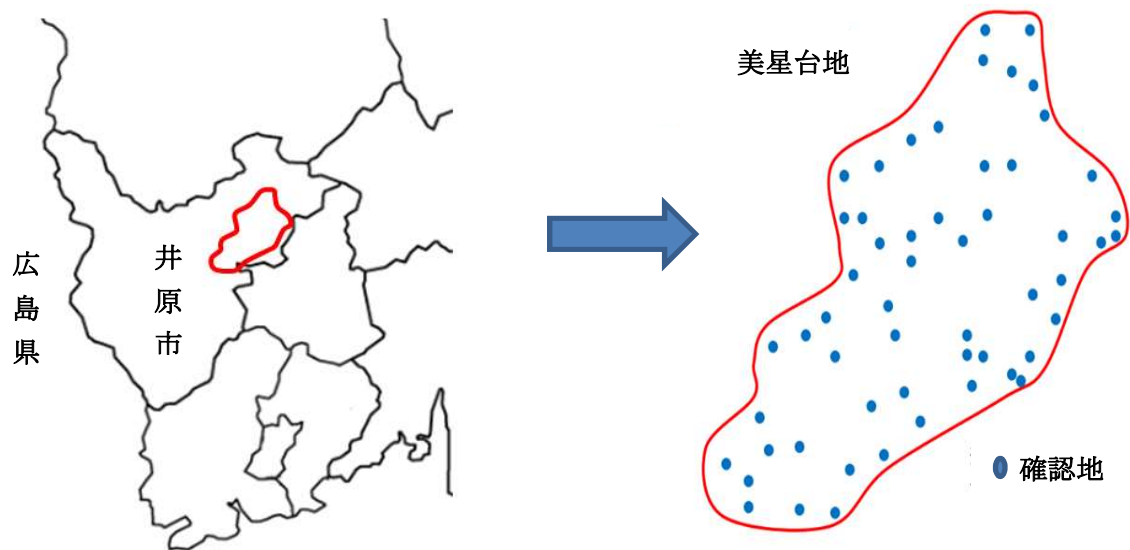
4 調査からの考察

2017～2018 年の 2 年間、夏（6～7 月）と秋（9～10 月）の 2 回ずつ調査を行った結果、美星台地の生息地をほぼ把握することができた。次ページの左図は岡山県南西部における美星台地の位置、右図は美星台地でウラギンスジの確認できたポイントを青丸で示したものである。場所による少々の濃淡はあるが、ほぼ台地の全域に生息していることが判明した。分布の境目は正に台地面と台地の斜面との境目である。

この調査で分かってきたことに私の考察を加味して次のようにまとめた。

①耕作放棄地は最後の砦

ウラギンスジは長草草原のチョウである。長草草原とは美星台地ではススキをイメージしてもらった方がいいが、セイタカアワダチソウが混じるなど、もう少し荒地の場合もある。



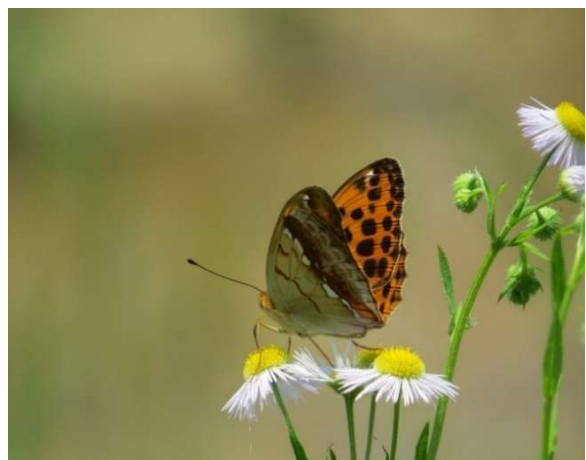
この長草草原にメスは潜り、オスはこのメスを探索してこの茂みの中に突入し、そして交尾して秋にメスはここで産卵する。夏も秋もこの行動を繰り返すが、秋のオスはメスを追尾することにそれほど執着しない。交尾の中心はやはり夏であると思う。

中～短草草原を主な生息地とするウラギンとは吸蜜の時に中草草原で競合するが、基本的には棲み分けが見られる。両者が訪花の際に鉢合わせした時、ウラギンスジがウラギンに追い立てられることが多く、ウラギンに対して常に劣勢であった。

美星台地も高齢化が進んで耕作放棄地が多く見られるが、比較的管理が行き届いており、そのまま灌木が生い茂って荒れていくということはない。ある程度草が伸びると草刈りが行われ、再び短～中草原にもどっていく。このことがウラギンスジにとって好環境を作り出してくれている。日本の草原的環境が著しく減少してしまった現在、この耕作放棄地という長草草原がウラギンスジの最後の砦になっているように思う。耕作放棄地はゆるやかな谷筋の一番奥の水田または畑から始まるため雑木林との境であり、森林性のヒョウモン類との接点でもある。



水田上段の耕作放棄地 (美星町明治)



ヒメジョオンで吸蜜するメス (美星町黒忠)

②森林性ヒョウモンとの遭遇も回避

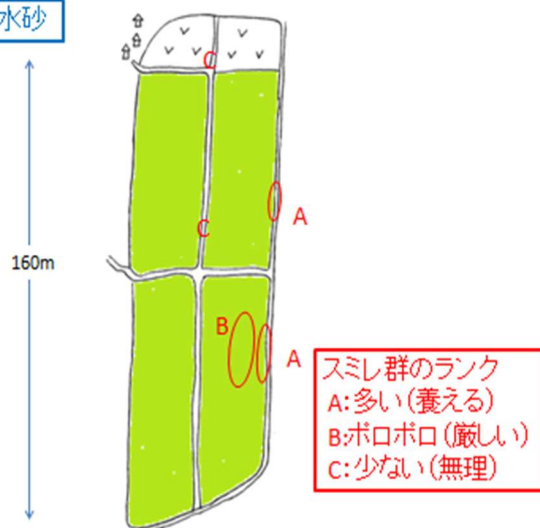
ウラギンスジが森林地帯に進入することはほとんどなく、森林帯を越えて別の地域に移動するということが観察できなかった。むしろ避けているように思える。美星台地から低地への斜面の部分は森林で覆われているが、この斜面にも一部集落が発達している。烏頭、宇戸、宇内、北山町、宇戸川、花滝などがそうであるが、ウラギンは確認できてもウラギンスジは見つかっていない。台地の上でもその集落のほとんどが森に囲まれている稗原、西江原、黒木などでは、ウラギンスジはほんの入り口の部分で見られる程度である。これらのことからミドリヒョウモンやメスグロヒョウモンなど（以下ミドリ、メスグロなど）の森林性ヒョウモン類との遭遇を嫌い、森林地帯の通過さえ避けているのではと感じる。つまり草原性のウラギンに対しても、また森林性のヒョウモン類に対してもウラギンスジは劣勢である。

③スミレをめぐる棲み分け

短～中草草原のウラギンと、森林性のヒョウモン類（ミドリ、メスグロ、クモガタ、オオウラギンスジ）に挟まれた長草草原のウラギンスジが、どこのスミレを利用しているのかは大きな謎であった。当初は草原性のヒョウモンであるからウラギンと同じ短草草原のスミレを利用していると思っていたが、観察を深めるとそうではなく、長草草原の縁のスミレを利用していることが分かった。

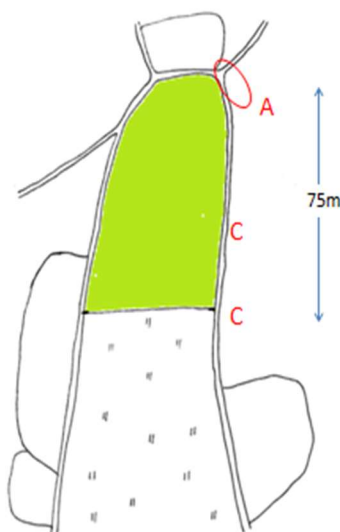
そこでウラギンスジの生息ポイントでのスミレの量を調べることにした。長草草原の周りにはたくさんのスミレが存在していると想像していたが、調査してみると陽を好むスミレは極めて少なく、この程度のスミレでこれだけのウラギンスジを養えるのかという疑問を強く抱いた。右の図はその代表的な生息ポイントである。この

井原市美星町東水砂



井原市青野町

スミレ群のランク
A:多い(養える)
B:ボロボロ(厳しい)
C:少ない(無理)



2つの生息地（緑色）は個体数が多く、また夏だけではなく産卵期の秋でもメスが確認できた場所である。同様に他の8か所でもスマレを調べたが、結果はどれも多くはなかった。ほとんどスマレが見つからない所もあった。

④耕作放棄地が無数に点在し、これらが分断されずに繋がっていること

観察を続けた結果、個々の生息ポイントで養える個体数は少ないものの地域全体でそのようところが無数に点在していて、総合的には多くの個体数が維持できているという考えにたどり着いた。美星台地には一定の広さがあり、その条件を十分に満たしているのではない。次々と消滅していった近隣の地域を見ると、一見美星台地と同じ環境のように見えても森林でいくつかに分断されており、そこまでの広さを有していない。現在はまとまった個体群を維持できるだけのスペースを失ってしまっているのである。この条件はウラギンスジにとってかなり厳しいものだと思っている。

⑤母蝶のスマレの認識度

もう一つの疑問は、母蝶が産卵時にスマレの存在をどの程度認識しているかである。私の今までの観察において、ウラギン、ミドリ、メスグロが立木の樹皮や地面の枯れ草、小石などに産卵する時、その周辺のスマレの存在をかなり認識していると感じることが多い。しかし、ウラギンスジは長草草原の中で産卵するため、母蝶のスマレの認識度を明確に確認することは難しい。おそらく母蝶はどこかの時点でスマレを認識していたのではないかと推測しているが、具体的には検証できていない。いずれにせよ、スマレとはかなり離れた場所で孵化した幼虫が、長い距離を徘徊しなければスマレに到達できないことになり変りはない。ウラギンスジの母蝶だけでなく孵化した幼虫がスマレの位置をどのように察知するのかも大きな課題として残った。今後も調査を続けたいと思っている。

5 まとめ ―ウラギンスジが生息できるための条件―

以上述べてきたことをまとめると次のようになる。

- ・耕作放棄地である長草草原が相当多くその地域に存在していること
- ・その長草草原の縁にスマレがある程度まとまってあること
- ・吸蜜源（例えばアザミ）としての中草草原が周囲にあること
- ・これらの草地（農耕地）が森林で分断されることなく一定の広さを有していること

参考文献

- 1) 藤本徹哉, 2017. 岡山県笠岡市の草原性チョウ類4種の現状について, 日本鱗翅学会中国支部会報 18号: 15-22pp.
- 2) 藤本徹哉, 2018. 岡山県南西部におけるウラギンスジヒョウモンの現況, 日本鱗翅学会中国支部会報 19号: 9-12pp.
- 3) 岡野貴司, 2018. 2017年美星台地のウラギンスジヒョウモン, みちしるべ第54号, 岡山昆虫談話会: 577-578pp.
- 4) 三宅誠治, 2002. 岡山県蝶類データ集, 株式会社アイデアス: 803-808pp.

フレンチ・ギアナの鱗翅目について II

―「チョウ」なのか「ガ」なのか、触角を比べた―

田村 昭夫（鳥取県）

はじめに

筆者は2017年9月19日より29日までフレンチ・ギアナ（French・Guiana）に出かけ、それを旅行記の形で発表した（田村，2018）。書いている中で常に疑問に思っている種があった。それが図1である。2017年の広島で行われた支部例会では「ドクチョウ」と話をしたように記憶している。2018年に岡山で開催された支部例会では「ヒトリガの一種」と述べた。2017年と2018年の両年の発表内容にブレがあった。支部会報19（田村，2018）では、①を *Tithorea* sp.（カバタテハマダラの一種）とし、②，③の2個体を *Heliconius hecale*（オオキマダラドクチョウ）としていた。



図1 よく似ているチョウとガ

広島例会では3個体とも「チョウ」と思っていたが、十分に納得していた訳ではなかった。それは3個体の触角の形状にあった。

「チョウ」と「ガ」

そもそも「チョウ」と「ガ」を区別すること自体がナンセンスという意見もあるが、収集を始めてからずっと「チョウ」と「ガ」を分けて採集してきたので、やはり「チョウ」なのか「ガ」なのかははっきりさせておきたい。

様々な図鑑では、チョウとガの区別点の一つとして触角の形状にあると記されている。すなわち、チョウの触角は「棍棒状」，ガは「糸状」「羽毛状」と記される。また「チョウ」と「ガ」の区別点は「前翅と後翅を繋ぐ翅刺」（図2）（広渡，2011；神保，2018）と蛾類の大まかな特徴と記してある。しかし筆者は展翅をしているので見えないし、顕微鏡も有していないので、「チョウ」と「ガ」を分ける区別点として触角の形状に頼る

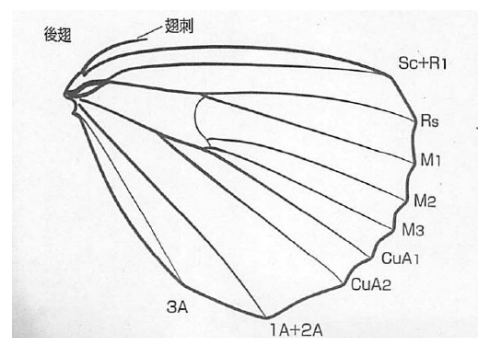


図2 後翅翅脈にある翅刺
（日本産蛾類標準図鑑より）

こととした。そこでフレンチ・ギアナ で採集した昼に飛ぶ各種の鱗翅類の触角を比べた（一部ペルー産の標本もある）（図 2）。

①～④はチョウである。④は図 1 の①に当たる。④はかろうじて先端でまとまっているように見える。②はセセリチョウであるが、ちょっと変わった触角をしているが、水滴のようにまとまっている。⑤～⑧はガである。⑦の *Urania leilus* はフレンチ・ギアナ に生息しているか分からないが、現地では *Urania sp.* が翔んでいるのを見ているので *Urania leilus* を代用した。⑧の *Castnia licus* についても同様である。⑤は図 1 の②に当たる。④のように先端はまとまっていないで糸状に伸びている。⑥⑦も同様であるが、*Castnia* はチョウのようにまとまっている。何にも知らないで触角だけで判断すると間違える。*Castnia* のような例もあるが、触角の形状で図 1 の②・③は「ガ」と判断した。

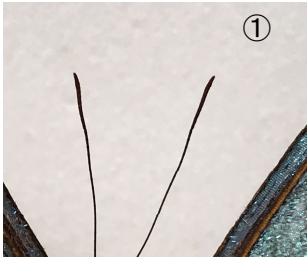
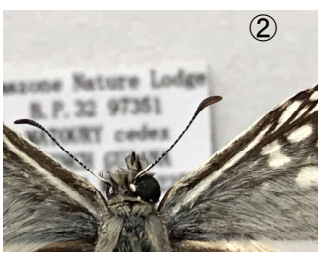
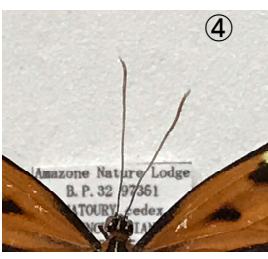
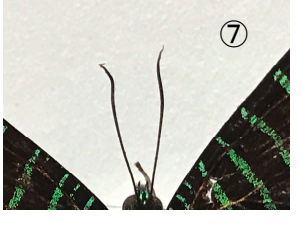
			
<i>Morpho eugenia</i>	<i>Pyrgus oileus</i>	<i>Heliconius wallacei</i>	<i>Melinaea sp.?</i> <i>Tithorea sp.?</i>
			
<i>Chetone sp.</i>	<i>Chetone catilina</i>	<i>Urania leilus</i> : (Peru)	<i>Castnia licus</i> : (Peru)

図 3 昼飛翔する鱗翅目の触覚

図 1 の②の種名は

②をガと判断したならば、種名が問題になってくる。

そこで手元にある *Mariposas Nocturnas* (A3 版 143PP. アメリカで印刷された中南米のガの図鑑) を見たが近い種類は出ていなかった。 *Hétérocères de Guyane Française* のヒトリガの項目を見た。そうすると *Chetone catilina* を見つけた。 *Chetone* を Wikipedia で検索したところ 22 種が表示され、その何種かは図 1 の②に似た種が表示された。 *Hyalurga*, *Dysschema*, *Calodesma* を検索したが、似た種は表示されなかった。 *Arctiidae de Guyane Française* では *Chetone catilina* しか見つけることはできなかった。

岸田泰則氏（日本蛾類学会会長）に確認のため写真を送ったところ、 *Chetone* の一種という回答を得た。属名までは迫ることができたが、種名までは分からなかった。⑤は *Chetone sp.* とする。

なぜチョウとしたのか

筆者は最初に *Chetone sp.* をチョウと同定していた。触角は採集した時から気になっていたが、斑紋がドクチョウにそっくりだったことと、ドクチョウと思いながら採集していたために

Heliconius hecale (オオキマダラドクチョウ) と誤った同定を行なっていた。実際に *Chetone* sp. は、昼間ドクチョウのように主に開けたところを翔んでいた。

ヒトリガの仲間は、世界の半分以上の種が新熱帯区に分布し多様である(上田・吉松, 2011)。多様性については前報(田村, 2018) でいくつかを紹介している。ヒトリガの *Chetone* のグループのような種は昼間に飛んでいるようである。*Chetone catilina* もそのうちのひとつと思われ、アサギドクチョウ *Philaethria dido* に擬態しているように見える。だけど同じ昼に飛ぶ *Urania* や *Castnia* のように早く飛翔できない。生き残るために、体内に有毒物質(青酸配糖体)を蓄えているドクチョウ(本田, 2005)に擬態しているのであろう。

今回のドクチョウに擬態していると思われる *Chetone* sp. を紹介したが、トンボマダラに擬態していると思われるヒトリガ *Hyalurga lauronoides* も採集している。本種は夜に採集しているので間違えることはなかった。トンボマダラも体内に有毒物質を蓄えているチョウ(本田, 2005) である。

終わりに

整理してから「チョウ」なのか「ガ」なのかと気になっていたが、ようやく「ガ」として結論を出した。やはり触角の区別点は大きかった。いつも見慣れている日本や近い東南アジアの鱗翅目では「チョウ」と「ガ」に迷うことはない。初めて見る南アメリカの擬態しているガにすっかり惑わされてしまった。

謝辞

ようやく属名までは分かった。これもお世話になった方のおかげである。

沼田康夫氏(神奈川県)には帰国後もフレンチ・ギアナのガ類に関する情報をいただいた。また岸田泰則氏(日本蛾類学会会長)には同定のアドバイスをいただいた。記して感謝の意を表す。

引用文献

- 広渡俊哉(2011) 鱗翅類の概要. 12-15. 岸田泰則(編) 日本産蛾類標準図鑑 I. 352pp. 学研教育出版, 東京.
- 神保宇嗣(2018) チョウとガの違い. 21. 国立科学博物館・読売新聞社(編) 特別展 昆虫. 183pp. 読売新聞社・フジテレビジョン, 東京.
- 本田計一(2005) 防衛戦略. 467-506. In ; 本田計一・加藤義臣(編) チョウの生物学. 626pp. 東京大学出版会, 東京.
- 田村昭夫(2018) フレンチ・ギアナの鱗翅目ーヒトリガがいっぱいー. 日本鱗翅学会中国支部会報 19 号, 2-5.
- 上田恭一郎・吉松慎一(2011) ヤガ上科. 466-496. In ; 駒井古実・吉安 裕・那須義次・斉藤寿久(編) 日本の鱗翅類ー系統と多様性. Xx+1308pp. 東海大学出版, 東京.

日本鱗翅学会第65回大会（松本大会）参加報告

岡野 貴司（岡山県）

〈中国支部からの参加者〉

田村昭夫（鳥取） 岡村元昭（山口） 三宅誠治（岡山） 岡野貴司（岡山）

〈評議員会・総会〉

○2018年度 活動報告

- ・やどりが 256~258号の発行
- ・蝶と蛾 69(1)より電子化、69(2) 10/31 発行、69(3,4) 12月予定
- ・HPのリニューアル（4月より） アクセス数は微増（+0.6%）
- ・2019~2021年度の評議員選挙
- ・2019~2021年度の会長選挙、八木新会長（大阪府立大）
- ・第65回大会（松本）の開催

○会員数の推移と会計

- ・2018年度（1月）の会員数 984名。前年度より21名減で1000名を割る。
- ・会員数減と「蝶と蛾」の広告収入消滅で計約77万円減。しかし「蝶と蛾」電子化による節減（制作費、送料）で、ほぼ例年通りの予算が組めた。

○学会賞および奨励賞の新設

- ・2019年度に具体的な規定を制定
- ・2020年度より実施

○支部助成金の年度末報告の義務化

- ・今までは申請が承認された後の報告が曖昧であった。

参考：2019年度の補助金承認は東海支部の30,000円、中国支部の45,000円の2件

○2019年度の主な計画

- ・第10回日本鱗翅学会自然保護セミナー 3/2(土) 大阪府立大学アイサイト難波
- ・第66回大会 11/9(土)~11/10(日) 大阪市立自然史博物館

参考：2020年度 東海支部（10月、名城大学を予定） 2021年度 関東支部

〈本大会〉

「高山性生物の成り立ちと現状」

- ・基調講演「北アルプスの生成と地形発達史」 原山智氏（信州大学名誉教授）
- ・事例講演 4本（北アルプスに関連したテーマ）
- ・一般講演 27本（含：三宅誠治氏）
- ・小集会での発表 8本
- ・ポスター発表 4本
- ・標本発表 10本

第 20 回日本鱗翅学会中国支部例会

2018 年 11 月 17 日（土）13:00~17:00
倉敷市立自然史博物館 地階講義室

事前行事 博物館見学（12:00~12:50）

- 1 支部長あいさつ（13:00~）
- 2 日程説明（13:05~）
- 3 「むしむし探検隊」紹介（13:10~13:40）
- 4 研究発表（13:40~16:10） 質疑応答を含めて各 35 分，途中休憩
 - (1) フレンチ・ギアナ採集記Ⅱ 田村昭夫（鳥取県）
 - (2) 山口県の昆虫 RDL (2018) 蛾類・蝶類の選定種について 後藤和夫・五味 清（山口県）
 - (3) ヒオドシチョウの生態（予報） 本田計一（広島県）
 - (4) 2018 年岡山県美星台地のウラギンスジヒョウモン 岡野貴司（岡山県）

5 総会（16:25~）

(1) 現役員の確認（2018 年 1 月~12 月）

日本鱗翅学会評議員 本田計一、田村昭夫、岡野貴司

中国支部長 岡野貴司（岡山県）

中国支部会計 若槻 匡（岡山県）

	広島県	岡山県	鳥取県	島根県	山口県
県幹事	亀山 剛	岡野貴司	田村昭夫	淀江賢一郎	村田 淳
県自然保護委員	亀山 剛	三宅誠治	田村昭夫	淀江賢一郎	後藤和夫

支部会員数 44 名 + 1 法人（広島 13 岡山 13 鳥取 6 島根 3 山口 9）

(2) 2019~2021 年度の新役員

日本鱗翅学会評議員 三宅誠治、岡村元昭、亀山 剛（選挙結果）

中国支部長 三宅誠治（岡山県）

中国支部会計 岡野貴司（岡山県）

	広島県	岡山県	鳥取県	島根県	山口県
県幹事	亀山 剛	岡野貴司	田村昭夫	未定	岡村元昭
県自然保護委員	亀山 剛	三宅誠治	田村昭夫	未定	後藤和夫

※各県で協議の上、事務局まで連絡してください。支部会報 20 号（2019 年 4 月発行）への掲載をもって決定いたします。

(3) 報告・連絡事項

- ① 日本鱗翅学松本大会報告（資料 1）
- ② 2018 年度事業報告、2019 年度事業計画（資料 2）
- ③ 会計中間報告（資料 2）
- ④ 2019 年度支部助成金申請書（資料 3）
- ⑤ その他

(4) 協議事項

- ・ 支部規約の改正、および確認（資料 4）

倉敷市立自然史博物館「むしむし探検隊」の活動紹介

岡野 貴司

1 はじめに

日本鱗翅学会をはじめ、多くの昆虫関係の学会や協会、同好会などで会員の減少に歯止めがかからず、若手虫屋の育成が大きなテーマとなっている。倉敷市立自然史博物館が指導している「むしむし探検隊」の活動に何か大きなヒントが含まれているのではと考え、2人の隊員に発表をお願いした。2002年に同博物館によって結成された「むしむし探検隊」は、野外探検（昆虫調査）、虫の観察、標本の作製、学術出版物への投稿、博物館活動への参加といった一連の活動を通じて、昆虫に関する専門知識と技術を学ぶことを目的としている。対象は小学5年生から高校3年生までで、現在隊員は15名である。隊員が将来、プロであれアマチュアであれ一生虫屋としての活動を続けて鱗翅学会をはじめ各種昆虫関係の団体の担い手になってくれることを願っている。

2 むしむし探検隊の活動紹介 — 植松君 —

植松蒼君は小学5年生から探検隊に参加し、高校2年生（2018年）になった現在では、隊の中心的存在となっている。彼の説明に沿って、「むしむし探検隊」の一年間の活動を



笠岡市六島の採集風景（2018.6.10）

間取り組んできた成果を同博物館の講義室で発表するのである。持ち時間は1人12分、パワーポイントやポスターを使って説明し、その成果をお互いに学びあう。探検隊を指導する当博物館の奥島学芸員や一般参加者からの厳しい質問にも丁寧に答えていた。なお、植松君の発表のテーマは「オサ掘り～目指せ百掘り、百虫～」であった。また、隊員には昆虫関係の各種学術出版物への投稿も勧められており、多くの隊員がこれに挑戦し、記録をきちんと残すという力が養われている。

見てみよう。4月の「オリエンテーション」をへて新しい年度が始まる。活動の大きな柱である野外探検を今年（2018年）は6月と8月に実施した。6月はここ数年来続けている瀬戸内の島嶼部調査の一環として笠岡市六島へ、そして8月は吉備高原の総社市宇山へと出かけた。11月の博物館祭りへの参加も大きなイベントである。探検隊でブースを設け、多くの来館者に昆虫の面白さをアピールした。一年間の活動の締めく

くりは3月の研究発表会である。この一年

3 ウスタビガの雌雄型発見 — 安達さん —

2017年11月22日、高校3年であった安達由莉さんは学校の校外行事の一環として広島県の宮島水族館へバスで向かっていた。そのときたまたま立ち寄った小谷SAで、このガを見つけたのである。幸運としか言いようがないのだが、その異常さを一瞬で見抜いたところが正に探検隊員としての実力であった。採集道具を持っていなかったのも、急いでバスのエチケット袋に入れて持ち帰った。これが奇跡ともいえる発見の経緯である。この個体は胴体の中心から右がメス、左がオスという完全な雌雄型であり、ウスタビガでは10～20

万頭に1頭の割合でしか生じないとする文献もある。しかし、彼女にとってこの大発見だけでは終わらなかった。新聞やテレビ等のインタビューをいくつか受けるなど様々な発表の機会を得たことは、大学で生物を専攻することになっていた彼女にとって大きなプラスとなった。そして、これらの発表がきっかけとなって国立科学博物館の神保宇嗣氏から博物館を案内していただくとともに、直接ご指導を受けるというチャンスにも恵まれたのである。なお2019年に大学生となった安達さんは、副隊長の一人として「むしむし探検隊」に参加し、後輩への指導にあたっている。



【山口県のギフチョウの採集自粛継続のお願い】

山口むしの会は、2006年から山口県内のギフチョウ保全活動を実施してきましたが成果が上がらず危機的状況にあるとの認識に達し、2013年3月に、無期限で山口県内での卵から成虫に至る全ステージ、およびカンアオイ類の採集自粛のお願いを下記文章にて全国に向けて発信しました。それから6年が経過しましたが事態は好転していません。

この三年間はRDBの見直しもあり採集規制も視野に入れ、生息域の環境保全や、シーズンには交代で現地視察と観察を続けてきました。しかし、いまだに県外の採集者を見かけます。また、食草の盗掘や、保全地に無断で立ち入るなど非常識な行動をする方が後を絶ちません。RDL2018は三月末で公表されましたが、カテゴリーは絶滅危惧1A類(CR)と二段階もランクアップされ、絶滅は寸前との認識から法規制の対象種として現地視察が始まります。

2019年2月23日

山口県のギフチョウ採集自粛のお願い

山口むしの会保全委員会

山口むしの会では山口県のギフチョウが危機的状況にあるとの認識に達し、全国同好の皆様へ2013年春季から無期限で、山口県内での卵から成虫に至る全ステージ、およびカンアオイ類の採集自粛をお願いすることとしました。

本県のギフチョウは、以前はさほど珍しい種ではありませんでしたが、自然環境の人為的改変や植生遷移が進み、最近では地域ぐるみで生息環境の保全活動に乗り出している一部地区を除いて個体数が激減し、かつての多産地でもめったに見かけることができなくなりました。

このような状況下で、日本の西限地域という地域特性からか、毎年採集者が殺到して採集圧を加えるとともに、生息地域の住民や保全活動に取り組む方々との摩擦が顕在化しています。

そこで、まずは本県ギフチョウの窮状を訴え、同好諸氏の賢慮に期待して今後の推移を見極めるのが現状では最善と判断したものです。採集圧のみを抑制しても個体数が回復する保証はありませんし、法的根拠を伴わず採集“自粛”では決定的な拘束力となり得ないことも承知しています。しかし、何の法的権限もないのにこのようなことを皆様に要請せざるを得ない現状をご賢察ください。

やがて個体数の回復が見込める見極めがつけば自粛を解きたいと考えていますので、趣旨をご理解の上ご協力をお願いします。しかし、今後の状況次第では保全活動と法的拘束力を伴った措置をセットで行政に働きかけることになるかもしれないほどの状況にあることもご認識ください。

最後に、山口県のギフチョウは、せっかく来県されても成虫を見ることすら叶わないことも珍しくありませんし、地元住民が保全活動をしている地域での採集行為はもっての外ですので、皆様の冷静で賢明な思慮を期待します。

2013.3. 吉日

2018年 中国支部会計報告

〈収入の部〉

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	49,443	
2018年支部連絡費	9,700	
2018年支部助成金	45,000	
例会参加費	15,500	会員 9, 非会員 11
計	119,643	

〈支出の部〉

項 目	金 額	備 考
支部会報第19号印刷費	47,736	100部印刷
印刷業者への通信費	250	
支部会報第19号送料	9,333	封筒, 郵送料
例会案内送料	3,312	はがき, 切手
例会運営費等	948	講義室使用料, 入館料補助
計	61,579	

繰越金 119,643 円－61,579 円＝58,064 円
 58,064 円は 2019 年会計へ繰越します。



例会参加の会員紹介
 (敬称略)

前列：本田（左1）、後藤（左5）、田村（左8）
 後列：中村（左1）、三宅（左5）、池田（左7）、岡野（左8）
 亀山（左10）、若槻（左11）

編集後記

今年度も中国支部会報 20 号を無事お届けすることができ、これで私の編集者の任も解かれることになりました。会員数の減少に伴って支部会報の原稿が集まりにくくなり、今後より多くの会員のみな様から投稿していただけるような体制を検討していかなければならないと感じています。これからもこの会報が中国支部の活動の中心として引き継がれていくことを願っています。

岡野貴司

書籍紹介

中井 衛 著 「棲み合いの論理－近縁種は競争しない－」

本学会会員であり、また山口むしの会の会員である中井 衛さんの著書。山口むしの会の会誌「山口のむし」に寄稿された3本の報文をまとめたものです。3度のモンゴル採集旅行で複数の近縁種が同じ草原に舞っている姿を見て、この「棲み合い」の論理に到達されました。ぜひご一読ください。 (発行元：昆虫文献 六本脚)

2019 年第 66 回日本鱗翅学会（大阪）のご案内

日時 2019 年 11 月 9 日（土）～11 月 10 日（日）
会場 大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区長居公園 1-23）

2019 年第 21 回中国支部例会（鳥取）のご案内

日時 2019 年 11 月 23 日（土）
会場 鳥取県立博物館（鳥取市東町 2 丁目 124 番地）

2019 年役員紹介

支部長	三宅誠治
支部会計	岡野貴司
県幹事	広島県：亀山 剛
	岡山県：岡野貴司
	鳥取県：田村昭夫
	島根県：－
	山口県：岡村元昭
自然保護委員	広島県：亀山 剛（委員長）
	岡山県：三宅誠治
	鳥取県：田村昭夫
	島根県：－
	山口県：後藤和夫

日本鱗翅学会中国支部事務局
〒701-0211 岡山県岡山市南区
東畦 697-51 三宅誠治 方
Tel: 086-941-1570
E-mail: miya@tamano.or.jp

日本鱗翅学会中国支部会報 第 20 号

発行日：2019 年 4 月 1 日
編集者：岡野貴司
発行者：日本鱗翅学会中国支部
印刷所：株式会社トライ・エックス

日本鱗翅学会中国支部会報 第 20 号 (2019 年 4 月 1 日)

目 次

日本鱗翅学会中国支部規約	表紙 2
支部長挨拶	1
第 20 回日本鱗翅学会中国支部例会研究発表	
(1) 山口県の昆虫 RDL (2018) 蛾類・蝶類の選定種について 後藤 和夫・五味 清 (山口県)	2-9
(2) ヒオドシチョウの生態 (予報) 本田 計一 (広島県)	10-14
(3) 2018 年 岡山県美星台地のウラギンスジヒョウモン 岡野 貴司 (岡山県)	15-18
(4) フレンチ・ギアナの鱗翅目について II 田村 昭夫 (鳥取県)	19-21
日本鱗翅学会第 66 回大会 (松本大会) 参加報告	22
第 20 回日本鱗翅学会中国支部例会 (岡山県)	23
むしむし探検隊の活動紹介	24-25
山口県のギフチョウ採集自粛継続のお願いー山口むしの会保全委員会ー	25
2018 年中国支部会計報告	26
編集後記, 書籍紹介, 2019 年全国大会・支部例会の案内, 2019 年役員紹介	表紙 3

〈表紙写真〉ヒオドシチョウ

かなり前のことで記録も無く記憶も怪しいが、5 月下旬のある日の昼頃、羽化後数日かと思われる一匹のヒオドシチョウが突如現れて家の外壁に止まった。自宅付近では滅多に見ることがないので、慌ててまだ出始めのニコンのデジタルカメラを持ち出して何枚か撮った。白壁を背景に、「緋緘」の名に恥じない鮮やかな緋色（深紅）が映える。撮影後にじっくり見てみると、既に左前翅の鱗粉が筋状に脱落していて外縁もごく少しだが欠損している。メスと思われるが、羽化時に何かトラブルでも有ったのだろうか、それとも狭い場所を潜り抜けて擦り傷を負ったのだろうか？ これから暑い夏をやり越し、寒い冬を乗り越えて、来春に子孫を残すまで少なくともまだ 10 ヶ月は生き延びねばならない。深手を負ってはいないようだがこの体で大丈夫だろうか？ この後、このチョウは近くのセイヨウマツムシソウをしばし訪れたのち軽快に飛び去った。

本田 計一